

## ● 資料紹介

### ● イスラムの新しい政治

Anthony Shadid, *Legacy of the Prophet, Despots, Democrats, and the New Politics of Islam*, Boulder, Colorado: Westview, 2001.

本書は20世紀末の中東諸国においてイスラム運動が成熟していく過程を描いている。1979年のイラン革命後、政治的イスラムは中東諸国の社会に浸透した。ところでイスラム運動が現実政治とより深く関わるにつれ、当初の急進性は弱まった。ヨルダン、イエメン、クウェートなどにおけるイスラム派政党は、選挙に参加する中で穏健化していった。またレバノンのヒズボラーは民兵から責任政党へと変身を遂げ、エジプトでは（元来非暴力的な）イスラム同胞団の中からさえ、より多元主義的な政党が誕生している。他方、イランとスーダンの革命イスラム体制下では、イスラムが必ずしも社会経済問題への解決に繋がらないとの認識も生まれている。この間、中東諸国で草の根運動を続けるイスラム運動に対し、大衆からの支持は依然として続いている。Associated Press カイロ特派員だった著者は、イスラム運動指導者や活動家との数百回のインタビューなどからなるフィールド・ノートを元に本書を執筆した。構成は以下のとおり。

序文／1. アイデンティティーの問題：アフガニスタンからエジプトまで、苦境の逃避先としてのイスラム／2. 交差とメッセージ：イスラムの解釈と再解釈／3. 隠された任務：国境の無い戦争における過激派イスラムの台頭と衰亡／4. 神の命：暴力の陰に、宗教と社会活動の融合／5. 信仰と祖国：神の独占とスーダンのイスラム政権／6. イランの教訓：イラン革命と政治的イスラムの再生／7. 西から東へ：新世代の思想家と共通認識の模索／8. 変化する遺産：新しい政治、新しい解釈、イスラム民主主義の開始／結語  
(問 寧)

### ● イランの衰退論／停滞論の動向

Seyyed Javād Tabātabā'ī, *Dibāche-ī bar nazariye-ye enhetāt-e Īrān*, Tehrān, Nashr-e Negāh-e Mo'āser, 1380, 562s.

Kāzem Alamdārī, *Cherā Īrān 'aqab mānd va Gharb pīsh raft?*, Nashr-e Touse'e, 1379, 568s.

1997年のハータミー大統領の登場以来、イラン国内の言論界はなお多くの制約はあるものの以前とは比較にならない活況を呈している。ここで紹介するのはそうした中で最近注目を集めている論考2冊である。

1冊目のタバータバーイー著『イラン衰退論序説』は、ハータミーの登場以前に『イランにおける政治思想の黄昏』(1373年)と『イランの政治思想史における哲学的帰結』(1372年)の2冊を上梓して評判になった(著者自身は国外に出ることにもなった)著者の3冊目であり、対象とする時代をサファヴィー朝(1501～1736年)以降に据え、当時の旅行記等を素材にしながらいランの政治思想の没落の過程をイラン文化の衰退と重ねつつ議論を展開している。

2冊目のアラムダーリー著『なぜイランは停滞し、西洋は進歩したか』の問題意識は、その書名において端的に表明されている。アラムダーリーはタバータバーイーよりも考察の範囲をさらに広げ、古代文明から説き起こして近代以降におけるイランの停滞の要因を社会経済史的・時代思潮的に探求していく。

ともにイラン国内では相当評判になったようであり、後者の手許にある版は第5版となっている。1版当り3000部としても1年足らずのうちに1万5千部というのだから、この種の本としては大変な売れ行きである。

内容的には特に後者については何でも取り込み過ぎて議論が拡散的になっているという批判もあるようだが、2冊ともに現在のイラン内外における知的・文化的活力を(逆動的に)暗示している。

(鈴木 均)